

2022年5月8日(日) 6課 使徒言行録 20章 17~38節

週題: 「それでもエルサレムへ」

暗唱聖句: そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。

使徒言行録 20章 32節

20:17 パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。

20:18 長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。

20:19 すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。

20:20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。

20:21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。

20:22 そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。

20:23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。

20:24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。

20:25 そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。

20:26 だから、特に今日ははっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。

20:27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。

20:28 どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。

20:29 わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。

20:30 また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。

20:31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。

20:32 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。

20:33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。

20:34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。

20:35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

20:36 このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。

20:37 人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。

20:38 特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。

この一週間の聖書日課を通して、パウロの宣教旅行について学んできました。

パウロは第2次宣教旅行でもエフェソを訪れましたが、その時は、もう少し滞在するようという人々の願いを断って、「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って旅立っています（使徒言行録18:20-21）。

そして、神の御心だったのでしょう。第3次宣教旅行では、二年以上もエフェソに滞在しました。「アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くようになった。」というのですから、パウロの熱心さ、力強さがどれほどのものであったか、想像に難くありません。

今日の聖書箇所は、そのパウロが、聖霊に促されて、エルサレムに向かうため、エフェソを離れる時に、エフェソの教会の長老たちに語った告別説教です。ここで過ごした日々を振り返り、多くの苦しみ、苦難に耐えながら、伝えるべきことはすべて伝えたと言語するパウロ。しかし、それは、「主イエス・キリストを知らないあなた方に教えてあげた」というような上から目線のものではなく、自分を全く取るに足りない者と思い、主にお仕えしてきた主の僕であるパウロの姿です。しかも、これから向かうエルサレムでは、投獄と苦難が待ち受けているというのです。自分を低くし、神の御心であれば、どのような苦難でも受け入れるその生き方は、正に主イエス・キリストの姿に重なります。

28節に「あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください」と書かれています。「外からの狼」だけでなく、中からも「邪説を唱えるもの」が出てくるというのです。人を惑わそうとしている人はいないか、惑わされて神さまから離れていってしまう人がいないか、目を配らなければなりません。しかし、「あなた自身に気を配る」とはどういうことでしょうか。群れに気を配るためには、まず、自分自身がしっかりとした信仰に立ち、最後まで主に従う覚悟を持つことが必要です。雑事に時間を取られ、群れを守ることに気を取られていると、ふとした拍子に狼が心の隙間に入って来て、足元をすくわれてしまいます。常に、み言葉に聞き、神さまの御心に従うことを一番に考える——目を覚ましていることで、神さまから離れることも、神さまから顔を背けることもなく歩んでいけると語るのです。

そして、「神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」（20:32）と語ります。「主イエス・キリストについて、神のご計画について、すべてあなた方に伝えました。ですから、もう、あなた方だけでやっていけます」と言っているわけではありません。真の教会は「神の教会」であり、神とその恵みの言葉によってのみ建て上げられるものなのです。教わったから、よく知っているから大丈夫と過信し、驕り高ぶって、人の知恵によって教会を運営しようとするのではなく、すべて、主にお委ねして、主の恵みにより建て上げていただくのです。

長老たちに語った告別説教ですから、私たちの教会でいえば、執事の方々ということになるでしょうか？しかし、執事の方々だけではなく、すべての教会員が自分に向けて語られた言葉として受け止めるべきなのではないでしょうか。「自分だけ神さまの恵みを受けられれば、それでいい」「『伝道する』など難しそう自分には無理」「ご奉仕は大変そう」など、いろいろな考えがあると思います。しかし、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ 16:15）というイエスさまの言葉にあるように、クリスチャンの大きな使命の一つが伝道なのです。もちろん、誰もが、パ

ウロのように、遠く離れたところに、危険を伴う旅をしながら、伝道できるわけではありません。家も家族も仕事もすべて捨てて、伝道のためだけに命を使うことが良いと言っているのでもありません。一人一人に与えられた力を用いて、それぞれの伝道を行うのです。私たちがイエスさまに出会うことができたように、まだイエスさまを知らない方にイエスさまに出会うチャンスを与えるお手伝いができたら、素晴らしいですね。

自分は何も得意なことがなく、役に立たないと思う方もいらっしゃるでしょう。しかし、教会に呼び集められた方々の中で、意味もなく招かれた方はいらっしゃいません。すべての方々に神さまのご計画、神さまから与えられた使命があるのです。今はまだわからないかもしれませんが、「受けるよりは与える方が幸いである」というイエスさまの言葉を心に留めたいと思います。

船まで見送りに行った人々、そして、パウロの心の内を思うと、胸が痛みます。苦難が待ち受けていることがわかっていながら旅立つ人を見送る辛さ、そして、自分のことを心配してくれる人たちを置いていく辛さ。しかし、パウロにとって一番大切なことは神の御心に従うこと、そして、エフェソの人々はパウロから教えられた一つ一つのことを思い出しながら、パウロを通して受けた主の愛を、今度は自分たちが伝えていく番であると固く決意したに違いありません。そして、2000年が経った今、今度は私たちが主の愛を伝えていく番です。恐れず、神の御心に従って、進んでまいりましょう。

● 分かち合い

- ・ 困難があると知りながら、その道を選んで進んだことはありますか？その時、支えとなったことは何ですか？
- ・ 神の教会として歩いていくために大切にしたいことは何ですか？

● 次週の予告

「神の前で、人々の間で」と題して使徒言行録 22 章 30 節～23 章 11 節から読みます。今週の「聖書日課と分かち合い」で、日々み言葉をいただきましょう。